

MfG_J_Genealogy_of_art_around_Nagaoka

トピックス _長岡、新潟のアートの系譜 の追加・再編集

目次

序 長岡はアートが溢れる町

1. 縄文時代 火焰土器とミス馬高

2. 平安から江戸期の芸術

- (1) 寺社宝物、文人墨客の逗留地、譜代大名牧野家に伝わる品々
- (2) 幕末の芸術家

木喰上人 石川雲蝶 良寛禅師

3. 芸術家を支援

- (1) 明治期の長岡の有力商人の芸術家支援の活動
- (2) コレクター駒形十吉と、大光コレクション、駒形十吉記念美術館
- (3) 長岡現代美術館の思い出 館長のあいさつ
- (4) 県立近代美術館を長岡に建設

4. 明治以降の芸術家（長岡、中越周辺）

- (1) 自分勝手に、十名ほど、リストアップ

小山正太郎	武石弘三郎	三輪晃勢	富岡惣一郎
川上四朗	横山操	三輪晃久	
牧野虎雄	亀倉雄策	大矢紀	

- (2) 戦後生まれの長岡出身の芸術家二人

近藤邦雄、浦上義昭

- (3) 現代日本画グループ、轟会の三人の絵が集まる町

横山操、加山又造、平山郁夫

5. 摂田屋のアート

- (1) 鎔絵

(2) 機那サフラン酒の大看板 ----- 詳細、摂田屋関連のMfG

- (3) 秋山孝長岡ポスター美術館

- (4) 書のアート 三題と一扉

(5) 平澤熊一 洋画家で、父は機那サフラン酒・離れ建設の棟梁

6. 長岡の町なか、特筆すべき特徴 モニュメントの多いこと

作者別に列記。

星野嘉保子・復元像

悠久山の多くの石碑、星野嘉保子の碑、他)

友情の双像、そのほか 作者別

広井吉之助、今井浩勝、元井達夫、峰村哲也

7. 近美の屋外展示作品

省略

参考

市内の美術館、市立図書館施設の紹介

横山操の大作コレクション、亀倉雄策氏のコレクション
長岡の町なか、特筆すべき特徴 モニュメントの多いこと

武石弘三郎の作品、亀倉雄策氏の遺作

長岡現代美術館の歴史

斎藤義重氏のアート作品

県立近代美術館

屋外作品展示

美術館前庭 (世界的庭園デザイナー 池野俊明さんの作品)

長岡造形大学

展示館MaRouの杜

これもアートでしょう

(1) 長岡大花火 ----- 詳細、花火、錦鯉関連のMfG

(2) 錦鯉

県立近代美術館エントランス ロダンの「カリアティードとアトラント」、
武石弘三郎作のブロンズ像、大理石像は、別文書にまとめています。

MfG_J_Sculpture_of_Takeishi_Kouzaburou_in_Niigata.pdf

MfG_J_Kinbi_Rodin.pdf

はじめに 長岡はアートが溢れる町

各時代の優れたアート作品の存在、日本画・洋画・彫刻・仏像・工芸から土器までアートの範囲の広さ、美術館・寺社や町なかなど所蔵・展示する場所、各々の多様さという点で、個人的には、全国地方都市の中では有数ではないかと思っています。

特に江戸時代の長岡は譜代大名牧野家の越後長岡藩城下町で、交通の要衝ということもあり、武家文化、町人文化が花開き、その精神文化は、城下と周辺の村々が壊滅した戊辰の廃虚の中でも消えることなく、今日の文化都市長岡を形成してきた歴史に繋がっていると思います。

ここでは、これら全てを記すことはできませんので、ガイドのなかでお話しているトピックスを中心に述べています。みなさんが関心のある分野と交差するところがあれば、大変うれしいです。尚、県立近代美術館、旧長岡現代美術館、駒形十吉記念美術館、そして良寛禅師、長岡花火、錦鯉については、別の文書に記しています。

その他、武石弘三郎の作品や亀倉雄策氏の遺作をはじめ、多くのモニュメントが見られます。

モニュメントの像の人物を像主といいますが、その像主、或いは碑文だけでなく、それぞれに歴史、関係した人々の想いがあり、短い文章ではとても言い尽くせない、素晴らしい物語を持っています。

その物語について、本やネットで調べながら周ることが、モニュメントの一番の楽しみ方だと思います。

この「ガイドからのメッセージ」の中には、市内の悠久山の、たくさんの石碑、友情の双像をはじめとする武石弘三郎の作品など、モニュメント関連の詳細の話を、いくつか掲載しています。

「ガイドからのメッセージ」の「リスト」に、記事の一覧表を用意していますので、参考にしてください。

1. 縄文時代

火炎土器

古代の抽象芸術作品

美しい女性 “ミス馬高”

膨大な土器、出土品

～ 当時は最終氷河期の縄文海進と、新潟平野の沈降で、海岸線は長岡近くにまで及んでおり、火炎土器が出土した関原丘陵は信濃川の河岸段丘上にあって、狩猟採集生活に適した場所だったようです。

2. 平安から江戸期の芸術

(1) 平安から江戸期の古志の繁栄

仏教の繁栄

～ 各地の寺社宝物、寺院のご本尊、秘仏

江戸期、交通の要衝として栄えた長岡藩は、文人墨客の逗留地でもあった。

～ 旅の途中に逗留の代表例 長谷川邸の谷文晁の作品

～譜代大名牧野家に伝わる品々は、どれもこれも素晴らしい逸品揃い。

～江戸時代の長岡は越後長岡藩の城下町として能・茶道・文人画などの趣味に長けた人材が多く、加賀藩の金沢と並んで北陸の文化的中心地だった。 (針生一郎「はじめて建つた私設現代美術館」『芸術新潮』1964)

(2) 幕末の芸術家

木喰上人 (1718～1810)

上前島金毘羅堂、小千谷市／小栗山木喰観音堂

石川雲蝶 (1814－ 1883)

魚沼の西福寺、三条の本成寺、長岡市柄尾の秋葉神社、他

良寛禅師 (1758 -1831)

滞在した旧家、各地の記念館・史料館、他

3. 芸術家を支援

(1) 明治期の長岡の有力商人の芸術家支援の活動

明治、有力商人は院展画家集団を作品購入で支えた。

妙高滯在の横山大観、良寛研究家でもあった安田鞆彦、

高田出身の小林古径 という、三人の引力

『風羅会』若き美術愛好家の情熱、陶芸の頒布会も度々開催

明治期の長岡には院展の作家を援助する、井口庄蔵らの人たちがおりました。

(風捷会の一人、井口庄蔵の父)

更に、昭和9年頃、美術商 松木氏、そしてそれに賛同した駒形十吉さんら四人の、

いづれも三十五歳前後の、裕福な商家の若きリーダ、その中の同好の士の集まりが

美術品の収集と画家の支援に活動していたそうです。 (駒形十吉記念美術館・資料)

そして、これらのメセナに通じる活動が、新潟の二人の昭和のコレクターの活動の下地にあったと思われます。その二人とは、

コレクター駒形十吉（大光コレクション、駒形十吉記念美術館）

コレクター敦井栄吉（新潟市の敦井美術館）

(2) コレクター駒形十吉と、大光コレクション、駒形十吉記念美術館

和田閑吉氏、敦井栄吉氏とともに新潟県の経済界の草分け的な存在として越後の三吉と呼ばれた

1901年(明治34年) 新潟県長岡市袋町生まれ、旧制長岡中学(現長岡高校)卒。

1928年(昭和3年)、創設支配人として北越産業無尽(現大光銀行)を再建にかかる。代表取締役社長として順調に業績を伸ばしていった。

1946年(昭和21年)には、第四代長岡商工会議所会頭に就任、長岡経済界の重鎮として長岡市の発展に尽力した。

息子の斎氏(2004年死去)の銀行乱脈経営により、大光コレクションは全国に四散。

駒形十吉氏（1901-1999）さんの活動

a) 作品領布会を通じて作家を支援

楠部彌式(1891-

富本憲吉(1886-

b) コレクターとして作品を購入

大光コレクション

梅原龍三郎(1888-1996)

高山辰雄

須田国太郎(1881-1961)

加藤唐九郎(1897-1985)

現代絵画A（一級品の巨匠の、主にアメリカ

作家の20世紀現代絵画）

現代絵画B（日本人を含む1960年代の

長岡現代美術館賞作品）

近代洋画A 日本人作家の近代洋画名品

近代洋画B フォンタネージュ、モネ

近・現代日本画A 近・現代作家の作品

c) 作品を購入して作家を支援～駒形コレクション（個人コレクション）

加山又造(1927-2004)

平山郁夫(1930-2009) 平山郁夫、加山又造の代表作も数点所蔵。

加藤重高

現代絵画C (20世紀現代絵画) 一部を県立近代美術館に寄託
 近・現代日本画B 現代作家の作品 駒形十吉記念美術館が所蔵
 (陶芸、工芸を含む)
 絵画では、須田國太郎、速水御舟など

二人の現代日本画家の名品が揃う駒形十吉記念美術館
 平山郁夫さんの院展出品の大作、シルクロードシリーズ初期の
 記念碑的作品が二点、長岡にある
 「塵燿のトルキスタン遺跡」(1970) 第14回院展出品作
 「中亞熱鬧図」(1971) 第15回院展出品作
 加山又造さん、トライした様々なジャンルの代表作品が、長岡にある
 「双馬」、「倣北宋山水図」、「水墨山水図」、
 その他、琳派的傾向の強い作品も。

※ 新潟市に、同時期、もう一人のコレクター敦井栄吉 (1888-1984)
 北陸ガス創業者、美術品収集家。日本美術院の作家が多い。
 直接揮毫や個展、グループ展で購入したものもあるという。
 以下に示すような多くの名品が、新潟駅万代口近くの北陸ガスビル
 一階にある敦井美術館に所蔵されている。

新潟出身の小林古径と懇意にしていた関係から、
 横山大観、安田靄彦、前田青邨、速水御舟といった
 日本美術院の画家たちと親しくしていたことによる。
 名品もいくつかあるが、多くは、交誼を得た画家に揮毫を依頼
 して手にした作品であり、そのため小品が多い。
 関雪、玉堂、觀山、麦僊、竹内栖鳳、村上華岳、奥村土牛、
 小倉遊亀などなどビッグネームが並ぶ

陶芸コレクション

各40点、23点、49点のコレクション
 12代酒井柿右衛門の東海道五十三次額皿55枚組(径 30.7cm)

堆朱

二十世堆朱揚成の30点もの作品

まさに、これらの作家と深く淡く交わった賜物であると感じる。

(3) 長岡現代美術館の思い出 館長のあいさつ

館長の挨拶 (長岡現代美術館所蔵品カタログ)
長岡現代美術館

日本民族は、鋭敏なそして豊かな感覚と、洗練された技術で、世界に冠絶した伝統ある美術文化を、つくりあげました。明治に入って、新しく西欧から洋画が伝えられ、それまで日本になかったリアリズムの世界を開拓しますが、今日までの一世纪にも満たない間に、世界のレベルに達して、その重要な役割を果すに至っています。

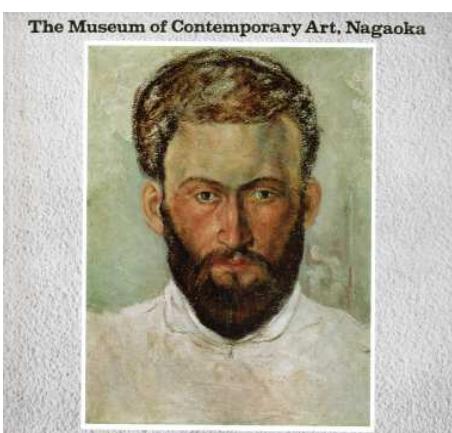
長岡現代美術館は、この日本の現代美術が、今日の世界美術の中において、どのように位置しておるかを、各国の美術と比較しながら示すと共に、近代において、それが如何に展開して来たかを、明らかにしようとするものであります。

このような美術館は我が国においても数少ないものとして重要な意義をもつものと思います。

長岡現代美術館は、現代美術の推進に積極的に寄与することを念願し、この意図に沿った一つの事業として1964年の開館以来「長岡現代美術館賞」を設定して、現代美術に新風を送りこみ、更に広く国際的にも活躍し得る能力を持つと思われる内外の作家を顕彰し、同時に明日のヴィジョンの開拓の原動力となることを期するものであります。

私は今後益々より一層美術館の充実を図り、教育と文化の振興に寄与すると共に、国際的にも貢献したいと深く念願している次第であります。

館長 駒形十吉



長岡現代美術館
所蔵品カタログ 表紙

(Printed on October 1, 1968)

(4) 県立近代美術館を長岡に建設

以下は、開館直前の、私のエッセーです。

1993年7月15日、長岡大橋西詰め、千秋が原の一角に、新潟県が99.5億円の費用を投じて建設してきた、延べ床面積10,723m²の新潟県立近代美術館が開館する。

新潟市・県民会館内に1968年開館した県立美術博物館を母体に、大光コレクションの一部80点(一説に150点)、県美術品取得基金で購入した240点を含めて1650点を所蔵する県美術館の再出発である。

大光・長岡現代美術館は、約30年前の1964年、長岡の中心部に大光相互銀行が設立した、展示室ひとつだけの美術館であったが、玄関脇正面の壁面に斎藤義重のレリーフ「大智淨光」を掲げる旧長岡現代美術館の建物は、いま、長岡商工会議所となっている。

70年代半ば、不幸にして大光相互銀行に乱脈経営事件が起り、1981年その経営再建策の一環として同美術館の所蔵作品を売却するやむなきに至り、新潟県もその一部を購入しているが、購入対象は日本近代絵画のみであり、外国作品は一点も購入していなかったとのこと。同コレクションの特色のひとつであった、今世紀の世界の代表的な画家の抽象画等の現代絵画の多くは、各地に四散してしまった。

幸い、当時は公立美術館建設ブームにあり、多くの自治体に同コレクションの多くが購入されることとなり、それぞれの美術館の代表的所蔵作品になっている。

近年、美術館めぐりの本が多く出版されているが、それらをひもとくとき、昔何度も見たことのある作品が各美術館の代表的所蔵作品として掲げられていることが時々ある。その一例として、大きなサイズに驚かされたジェイムズ・ローゼンクイストの「成長計画」は、隣県福島のいわき市立美術館に運び込まれている。

また、長崎県立美術博物館の所蔵品はポルトガル、スペインの近世南蛮美術を主体としているが、その中の現代作家の作品として、20世紀絵画の象徴パブロ・ピカソ、独特の色彩と造形のジョアン・ミロ、そしてシュールレアリスムの天才サルバドール・ダリの3人の小品をもつ。

いずれも、かつて大光コレクションを飾っていた作品である。

昨年、所用のついでに訪れた長崎で、この3点に再会した。

数世紀前に描かれたとは思えないほどの艶のあるイスパニア美術の圧倒されるような数の作品群に追いまくられるかのように、たまたま平日のせいもあったろうが、誰もいない広大な展示室の一角に、ひっそりと3点並んで掲げられていた。

この3人の故郷は、いずれもスペインのバルセロナを中心とするカタルーニャ地方。南蛮ゆかりの長崎で、肩寄せ合うように隣あって展示されていることに、不思議な

縁という言葉とともに相応しい落ちつき場所とも感じ、また所用のあとに足をのばした原爆資料館では、スペイン内戦のゲルニカの悲劇を描いたピカソを想つたりした。

最近は、公立美術館、またブリジストン、メナードをはじめ企業オーナーの設立による私立美術館等、大型の美術館が各地にあるが、まだ当時は、このような美術館は国内には少なく、現代美術に関しては「西の大原、東の長岡」として、その所蔵する20世紀美術作品の質の高いことで知られていたのである。

今、その一部が新潟の信濃川・昭和大橋のたもとから、10年振りに長岡の信濃川畔に戻ってくる。そして、開館記念の特別展として、同コレクション作品を所蔵する多くの美術館のご協力により貸し出され、「大光コレクション作品展」が催される。

ちょっと気取った文章ですが、高校から大学のころ、たびたび通った、長岡現代美術館の思い出、作品四散への想い、そして、その後の各地の美術館での美術鑑賞での再会したときの驚き、そんな気持ちを文章にしました。

この文章を、何人かの友達に送りました。そして、この25年後、近美のモネ展開催を機に、彼らに呼びかけ、一緒にモネ展を楽しみました。

4. 明治以降の芸術家（長岡、中越周辺）

(1) 自分勝手に、十名ほど、リストアップ

県内出身の芸術家は大勢おられ、長岡出身に限っても、小山正太郎、川上四朗さんだけではありません。

特に平成大合併により長岡市に組み込まれた各地の出身者を合わせると、まさに、芸術の町です。

海外からのゲストに説明するのは至難の業ですが、少なくとも国内のゲストに、長岡周辺出身の芸術家の画業や作品を、うまく説明したいと思っています。

大勢の芸術家がおられます、ここでは自分勝手に、

明治以降十名ほど、リストアップ

小山正太郎

川上四朗

詳細は、「摂田屋のアート」

牧野虎雄

川上四朗とほぼ同じ年、同じく藤島武二に師事。

武石弘三郎

横山操

三輪晃勢

亀倉雄策

三輪晃久

与板の日本画家集団

大矢紀

富岡惣一郎

詳細は、「雲蝶彫刻、富岡ホワイト」

・横山操

雪景色と言えば、吉田生まれの横山操の「越路十景」の中の作品の「蒲原落雁」や、単独作品の「雪原」は、両作品とも県外の美術館の所蔵ですが、新潟の雪景色を描いた絵の中で最高峰だと思います。

私は特に氏の大画面の絵が好きです。新潟県立近代美術館には「十勝岳」、「炎々桜島」があります。描かれた自然の力は、画面の前に立つものを圧倒します。蒲原のはさぎを点景のように描いた穏やかな風景画、ときには琳派風の豪華なデザイン画もあります。53歳で亡くなられましたが、もっと長くお元気であつたら、更にどんな作品を残されたか、と思いますと、本当に残念です。

・富岡惣一郎

トミオカホワイトについては、画家も色も、もっと評価されていいように思います。氏の代名詞とされる白の絵具の開発、さらに大画面制作のために考え出されたペインティナグナイフ、そしてキャンバスの研究も、もっと語られていいと思います。それぞれが図抜けた才能をもった大勢の大家のなかで、ひとつの世界を確立したと見做された人たちのみが、高く評価されるということで、芸術で名を残すことが、如何に大変か、すごいことなのだと感じています。

ついでにアート回廊の周回、魚沼ではありませんが、駒形十吉記念美術館、そして和島の菊盛記念美術館も、近くですから、ぜひ。

・牧野虎雄

川上四朗とほぼ同じ年で同じく美校卒。同じく藤島武二に師事した画家です。東京都現代美術館に多くの作品が所蔵され、県立近代美術館にも数点の作品があります。

・県内の現役日本画家の紹介

県立近代美術館にも所蔵品がある、与板出身の日本画家の三輪晃勢、その息子の三輪晃久も注目したいです。与板の大坂屋三輪家は、牧野家が分封の頃に与板に移った商家で、信濃川を往来する船運で繁盛、各藩に資金貸付や回米両替商として発展、宝暦年間には日本で三本の指に数えられる大豪商になったということです。

三輪家は良寛さんと親交があつたことでも知られています。

そして同じく与板出身の大矢紀、大矢十四彦の兄弟も、日本美術院の同人、特待の日本画家です。ちなみに日本美術院の同人、特待は、同時期に、現役で200人もいません。日展画家を合わせると、与板を含め、長岡の日本画の現役大家の集中率は、スゴイことです。新潟県中越には、美術の土壌があるんだと思います。横山操さん、三輪晃勢さんの絵も一緒に、日本画を楽しみましょう。

駒形十吉記念美術館、そして新潟市の敦井美術館という、近代日本画の名品を揃えた、珠玉の美術館があるので、県内作家の作品のみならず、楽しまないと。

・大坂屋三輪家の日本画家の系譜

三輪家の祖先は越中の豪士でしたが、加賀前田家との戦に破れその後長岡に移り住んだ際に大坂屋で働き、主人に認められ与板に暖簾分されたと伝えられています。江戸時代は信濃川の河川交通を利用し商売を行い米、塩、海産物を京都や大阪で販売し帰りの荷で反物、薬、書籍等を運び回船業、金貸等の商いで越後屈指の豪商となりました。

与板の大坂屋三輪家は牧野家が分封の頃に与板に移ったといいます。

信濃川を往来する船運で繁盛し、各藩に資金貸付や回米両替商として発展した。豪商備前屋江口家(伊能忠敬が宿泊)の勢力が衰退を始めた頃より勢力を伸ばし、宝暦年間には日本三指に数えられる大豪商として総資産百四十万両を誇った。1892年(明治25年)に大坂屋三輪家第11代当主三輪潤太郎(実業家、衆議院議員)によって自邸裏手の丘陵地に別荘である楽山亭(らくざんてい)が建築され、造園が行われた。潤太郎の実弟が洋画家の三輪大次郎(越龍)、その越龍の息子が日本画家の三輪晃勢、その息子も日本画家の三輪晃久であり、三輪家は、多くの画家を輩出している。

楽山苑は、大坂屋・三輪家の別荘。春には最近まで毎年恒例のライトアップ。庭内には良寛が江戸に托鉢に出かけた維馨尼に宛てた書簡の天寒自愛の

碑など、大坂屋と交流のあった良寛の詩碑が二基ある。

現在の楽山亭は、明治25年(1892)に大坂屋三輪家11代当主三輪潤太郎が国政に参画し、客人をもてなすために、斜傾庭園の高台に茶室風別荘として建てられ、景色を楽しむ為の柱を省略するなどの配慮がなされ、簡素の中にも粋や贅を尽くした名茶室を模した建物である。当時の著名な各界名士が数多く訪れている。

[左一と維馨尼]

六代当主九郎右衛門長高の弟・左一は良寛と深く交遊し、長高の長女のきし(後の維馨尼)を良寛は可愛がった。

又、左一は商才にも長けていたと伝えられる。三輪佐一は、後に良寛の禅に参じ法弟となった。良寛の胸中を最もよく理解した友人である。

7代当主長泰は良寛を魁でもてなしたと伝えられ、同家より借りた万葉集には良寛が『おのがの』と書き入れていた。

佐渡出身の土田麦僊や上越出身の小林古径、さらには吉田町(現・燕市)出身の横山操など、新潟県は優れた日本画家を多数生み出してきました。

身近なところ、与板からも、日本画のビッグネームが出ています。

阪之上小学校の伝統館に、小山正太郎の製作による、「小学校 図画教科書」があります。川上四朗は、童画という新ジャンルを切り開き、全国の子供たちに、新しい「子供たちの日常の生活の絵」を提供していました。そのように子供に影響を与えたであろう二人とも、長岡出身なんて、すごいなと思わざるを得ません。戦前に100体以上の銅像を製作した武石弘三郎の、絞り出したような戦後の作品。戦後のグラフィックデザインをリードした、亀倉雄策。この二人の屋外展示作品を日常的に見ることができる町が長岡です。

小山正太郎	長岡
川上四朗	長岡
牧野虎雄	(中頸城)
小林古径	(高田)
土田麦僊 《扇壳美人の図》	1906年頃 (佐渡)
武石弘三郎	中之島
横山操	吉田
亀倉雄策	吉田
三輪晁勢 《草の上》	1947年 与板
息子の三輪晃久も日本画家	与板
大矢紀	与板
富岡惣一郎	(高田)

(2) 戦後生まれの長岡出身の芸術家二人

近藤邦雄
浦上義昭

長岡
長岡

近藤邦雄さん(1949-96)

生命の誕生を思わせる、あたたかな木工オブジェというジャンルを作り上げました。イタリアなどで活躍した後、帰国して、これから、というとき、交通事故のため47歳の若さで亡くなりました。残念です。個人的ながら、近藤さんは、私の一年先輩で近所の神田一丁目におられ、中学、高校の美術部で合計三年間、お世話になりました。



長岡出身では、もう一名、浦上義昭さんという院展特待画家がおります。大変やわらかな色彩の画面は、まさにご本人そのもの。個人的ながら、浦上さんは、私と高校の同期です。

先に述べましたが、日展画家を合わせると、与板を含め、長岡の日本画の現役大家の集中率は、スゴイことです。この長岡のあたりには、美術の土壌があるんだと思います。

幸いに、県立近代美術館の収蔵品収集方針の一つに、県内出身画家、県内に縁のある画家の作品があり、いまでも、ときどきコレクションの常設展示で、一室を割いています。

横山操さん、三輪晃勢さんの絵も一緒に、日本画を楽しみましょう。

駒形十吉記念美術館、そして新潟市の敦井美術館という、近代日本画の名品を揃えた、珠玉の美術館があるので、県内作家の作品のみならず、楽しまないと。

(3) 現代日本画グループ、轟会の三人の絵が集まる町

横山操 (1920–1973)

加山又造 (1927– 2004)

平山郁夫 (1930– 2009)

横山操は、燕市出身で、新潟県立近代美術館に大作のコレクション。

加山又造、平山郁夫の二人は、駒形十吉氏が二人の才能に着目し、若い時から作品購入などで支援。

そのような縁から、この三人の大作の多くが長岡に集まっている。

70年代からの一時期、駒形氏が社長をつとめたテレビ局NSTの正月の特別番組で毎年のように、鼎談が放映された。加山又造と横山操、平山郁夫は、村越画廊が、'59年横山操、加山又造、石本正の三作家による日本画のグループ展轟会を開催し、後に平山郁夫が参加するなど、生前、一緒に活動することが多かった。

特に加山又造と横山操は、お互いを認めあう親友としての交流が知られている。

日本経済新聞 2018年2月11日

加山又造特集 賢兄・横山操

加山又造にとって7歳年上の日本画家、横山操(1920~73年)との出会いは劇的だったが、知り合うと最初からうまが合った。大酒蒙(横山)と下戸(加山)と二人には共通点がほとんどなかったことがよかったです。多摩美术大学教授に横山を説きふせ誘ったのは加山だった。「横山ほどすぐれた美大教授は一人もいない」と断言している。横山は学生たちに「被害者になるな、むしろ加害者になれ」と横極的な人生観を説いた。

二人は終生の友となった。しかし、ついに深くお互いの絵について論じ合うことがなく終わってしまった。絵の話をしていると何かしみじみして、しめっぽくなり、結局「何か出来るまでは死ぬなよ」と言い合った。旧態依然とした日本画を激しく批判する病床の横山に加山は同調した。二人は日本画の革新に挑む盟友だった。

関連作品を多く持つ美術館

県立近代美術館に、横山操の大作、そして加山又造の初期作品。

駒形十吉記念美術館 平山郁夫、加山又造、須田國太郎ほか

平山郁夫さんの秋の院展、シルクロード関連の初期の出品作もある。

塵燐のトルキスタン遺跡(1970年)、中亞熱闊図(1971年)

以下の美術館は、展示室は一室、あるいは小規模な展示室ですが、

いずれも所蔵作品は逸品ぞろいで、落ち着いて鑑賞できる場所です。

菊盛記念美術館 (長岡市和島) ロダン、高村光太郎、舟越保武ほか

舟越保武さんの、特徴的な婦人像も見ることができます。

舟越さんは、長崎26殉教者記念像の製作者としても知られ、

「長崎26殉教者記念像」で1962年の高村光太郎賞を受賞。

敦井美術館 (新潟市) 小林古径、速水御舟、土田麦僊、村上華岳ほか。

小林古径記念美術館 (上越市高田) 2020年の秋に、リニューアルした。

5. 摂田屋のアート

錫絵、秋山孝長岡ポスター美術館や書のアート三題と一扉については「摂田屋にある漢字デザインのストーリー」などで記していますので、ここでは大看板、平澤熊一を中心に述べます。

(1) 錫絵

(2) 機那サフラン酒の大看板

1997年に倒れ、売却されたものが新発田市内に所蔵されていたことがされていたことがわかり、摂田屋町おこしの会が購入した。修復と購入に900万円要したが、市民に募金を呼びかけ、またJR東日本鉄道文化財団の補助を受け、修繕した。

前回の公開はH23年6月、大看板をアオーレに展示。以後は、倉庫に横たわっている。その撤去・サフラン酒への輸送に200万円かかったという。ヒノキ製、本体部分は精巧な彫刻が施され、長さ640cm、幅194cm。その上に幅、奥行きともに212cmの屋根。

作者は、北海道・函館の高龍寺の建造などにあたった柏崎の宮大工集団の彫刻家、金子九郎次とされる。

正に精緻な彫りである。

柏崎の宮大工集団は、北前船の運行により、全国から仕事を請け、代表的なものに、函館の高龍寺がある。

「函館の高龍寺」

高龍寺は1633年に松前の曹洞宗法源寺の末寺として盤室芳龍氏の創建に始まる、函館で最も古い寺院。函館大火により建物は一度焼失し、明治12年に現在の場所に移転し、1900年に本堂が完成。

10個の建造物が国の登録有形文化財に指定され、特に山門は有名。

棟梁以下すべて越後衆、越後の彫師、原篤三郎氏と金子九郎次氏が作ったと言われる彫刻が細部にまでこだわったもの。

彫物製作年代:本堂・明治33年(1900)、山門・明治43年(1910)

また、蟻崎波響氏の最高傑作と言われる「釈迦涅槃図」も所蔵。

「番神堂」柏崎市指定文化財:有形文化財・建造物

明治4年の大火で類焼、同11年に再建され、本殿と拝殿の間に

石の間を設けた権現造りで、本殿の壁面には、彫刻が施されています。

棟梁は、四代目・篠田宗吉、石工・小林群鳳(ぐんぽう)、

彫刻は出雲崎の原篤三郎・脇野町の池山甚太郎・直江津の彫富(ちょうどみ)、

飾り金具は大久保の歌代佐次兵衛が鋳造したものです。

四代目・篠田宗吉は、東本願寺(京都市)本堂でも、副棟梁を務めた。

(3) 秋山孝長岡ポスター美術館

(4) 書のアート 三題と一扉

清水寺歴代館主の大西良慶師の天下甘露泉、森清範師の極上吉之川の書
 洋画家・中川一政氏の星六、味噌の文字
 作曲家・遠藤実氏の長谷川酒造・雪紅梅の書
 星野本店三階蔵の扉の商家訓の書と四庫全書

(5) 平澤熊一 洋画家で、父は機那サフラン酒・離れ建設の棟梁

平澤熊一は、1908(明治41)年、古志郡上組村大字摂田屋生まれ。
 1927(昭和2)年に工学院建築科を卒業。1928(昭和3)年、川端画学校洋画科で学ぶ。1989年12月4日逝去。享年81。
 平澤熊一は、1908(明治41)年、古志郡上組村大字摂田屋生まれ。
 1927(昭和2)年に工学院建築科を卒業。1928(昭和3)年、川端画学校洋画科で学ぶ。1989年12月4日逝去。享年81。

父親、そして兄が大工で、サフラン酒 の離れを作るほどの家に生まれながら、たまたま家業 の建築を学ぶ途中で絵への情熱捨てがたく、勘当されても 絵描きを続けました。熊一とサフラン酒と、こんな縁のつながりがあるなんて、知りませんでした。

貧乏に苦労し、栃木にアトリエ付きの一軒家を贖うために、自身の代表作とも云うべき大作「南苑」を手放すことにし、たまたま長岡の町が空襲で 長岡の商家に余裕がない時、隣り町見附の織物協同組合が買い取ってくれ、最終的に 見附市の所蔵美術品として、今日に至り、私らが、この 大作を見る事ができました。これも、ひとつのドラマです。
 見附からのゲストには、ぜひお話をしたいストーリーです。

6. 長岡の町なか、特筆すべき特徴 モニュメントの多いこと
 - 市内のモニュメント、銅像。 武石弘三郎の作品が多く残る。
 - 大光コレクション
 - 駒形十吉記念美術館
 - 各地の豪農、旧家に残る名品

まずは、三つの大きなモニュメント。長岡商工会議所・前庭の斎藤義重「大智淨光」、長岡赤十字病院・玄関前の亀倉雄策「HIGH SPIRIT」、ハイブ長岡の前庭の「米百俵の群像」、各々、製作者(、グループ)の代表作である、インスタレーションの傑作です。

市内の関連するブロンズ像と石碑

(1) 星野嘉保子・復元像

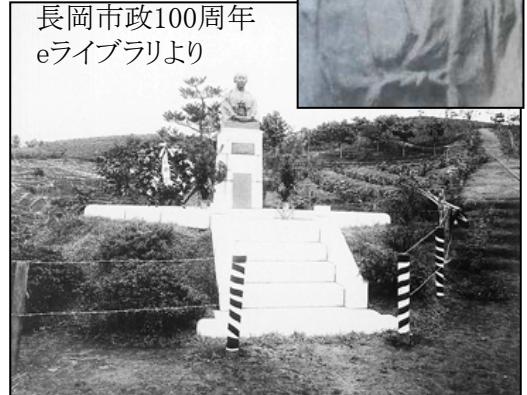


(草生津・唯教寺本堂前)

(2) 星野嘉保子の碑



1923年(大正12年)
建立の戦時金属供出
前の銅像
(武石弘三郎作)
長岡市史、及び、
長岡市政100周年
eライブラリより



(2) の碑文「以成肅雍之徳」は、西園寺公望によるもの。～別途、「ガイドからのメッセージ」に、「西園寺公望と大河津分水」に、日本女子大を含め、学校教育支援者としての西園寺公望の一面、そして京都の立命館大学にある西園寺公望像の復元像も説明しています。

(3) 悠久山の多くの石碑

詳しくは、別途、「ガイドからのメッセージ」に、悠久山の石碑について、まとめています。



松岡譲の碑 碑文、撰文とも堀口大學です。
二人の業績、交友を説明しています。

(4) 武石弘三郎の作品

市内長呂の「友情の双像」ほか、戦後の作品が多くあります。

「ガイドからのメッセージ」に、別途、武石弘三郎の作品をまとめています。

「友情の双像」



(5) その他

作者別

1) 作者不明

「野本互尊像」(1939)

長岡市明治公園内にある。（長岡市立互尊文庫の前）

2) 広井吉之助(きののすけ 1906-1986)

広井吉之助さんは1906年(明治39年)長岡市生まれ。東京藝術大学美術学部の前身である東京美術学校の彫塑科で学び、朝倉文夫、建畠大夢に師事。卒業後は東京を拠点に活動。

「平和像」

平和の森公園にある。

長岡空襲で亡くなった児童・生徒らの慰靈と平和への願いを込めて、昭和26年(1951)に新潟県教職員組合が150万円を集め、それをもとに広井吉之助制作のブロンズの「平和像」を長岡駅前に建立した。昭和49年には長岡駅前広場の拡張整備計画によって悠久山公園に移設されたが、この後、明治公園を経て平和の森公園へ。

長岡空襲の犠牲者1480人余に含まれる280人余の学童の靈を慰めるために作られ、像の中には銅版に刻まれた「昭和二十年八月一日長岡市戦災学徒名簿」が納められている。

「まいまいひめ」

大手通の西側終点部にある。

1958年7月、当時の新潟相互銀行が長岡市に寄贈した。

13年を遡る1945年8月1日、第二次世界大戦の長岡空襲で焼け野原となったこの界隈に置かれたのは、二度と再び戦争が起こらないようにという平和への祈りだといわれている。当初は道路中央の緑地帯に設置され、交差点の工事に伴って2003年に現在の場所に移されたそうです。なぜカタツムリなのか、その由来は判明していませんが、愛らしい名称は市内の小学生が参加した公募で選ばれたものなのだとか。

「三つの力」

さいわいプラザ(長岡市幸町2丁目)前にある。

「三つの力」は昭和39年(1964年)に長岡市厚生会館前庭噴水盤上に設置、北越銀行・イチムラデパート共同出資で長岡市に寄贈。

「火焔土器」

千手2丁目の道路脇にある。

昭和33年(1958年)に土器の出土記念として白セメントで作成。

長岡信用金庫より長岡市に寄贈。

3) 今井浩勝

「広井先生は長岡に疎開され、戦後しばらく長岡にお住まいでした。松本自身は教えを受けていませんが、松本の師匠である今井浩勝先生が昭和21年(1946年)から広井先生の指導を受けていたようです」と、広井さんの孫弟子に当たる松本さんの談。

「芽ばえ」

タクシー乗り場の手前にある。

1980年に上越新幹線開通に備えて制作、設置されたそうです。

長岡駅栄会の寄贈。

4) 元井達夫(-2019)、

新潟大学教育学芸能科卒、教員のかたわら、無所属で活動。日展に数回入選。

初期の具象から後半は石による抽象的な作風に変化してきた。

70歳くらいで病で半身動かなくなられて、その後、復活し、絵を極められています。

「良寛さん」 1983年

JR長岡駅改札付近にある。

上越新幹線開通記念として当時の駅長が発案し、長岡東ロータリークラブが寄贈。

制作者は地元の彫刻家で当時は長岡大手高校美術教諭でもあった元井達夫さん。

70歳くらいで病で半身動かなくなられて、その後、復活し、絵を極められています。

制作者の元井さんは今年4月(2019)に他界されたばかり。

いろいろな「出会い」がテーマ

大手通にある。かわいらしいブロンズ像の数々。

「縄文時代」

中央図書館の入口にある。

反対側にまわると、土偶のような顔があります。

「米百俵の群像」 7人のグループメンバーの作品(1991)

千秋が原・ハイブ長岡の前庭にある。

長岡市美術協会(米百俵群像制作委員)のグループ

平成3年「ふるさと創生事業」として長岡市が建立。

「シンボルロード」の7人のグループメンバーの作品

散歩道で出会える芸術として7つのブロンズ彫刻を手がけたプロジェクトで、

1993年に設置されました。

元井達夫さん、松本保忠さん、ほか

長岡市出身の童画家・川上四郎さんの5つの作品の「木の葉の旅」

「カエルの船頭さん」「あひるさんと散歩」「笛を吹く少女」「春が来た」を選び、

童画の世界を彫刻で表現したもの。

「シンボルロード」は1988年竣工、長岡駅から中央図書館へと続く全長670mの遊歩道

「三島億二郎像」

信濃川左岸、長岡赤十字病院裏にあります。



信濃川桜堤の三島像

悠久山 三島君之碑

元井達夫さん、その他の作品

新潟県長岡市寺泊 法福寺祖師堂の「日蓮聖人獅子吼」の銅像

長岡中央総合病院(中庭)に設置 長岡市川崎町2041番 春風 1984年制作

グループメンバー、ほかの方々との合同作品として

釜沢の「石彫の道」の石像群。

5) 峰村哲也

「風雲蒼龍窟・河合継之助像」(2009)

河井継之助記念館 藏

河井継之助記念館友の会が寄贈。

「長谷川泰像」

北越戊辰伝承館前にあります。

長谷川泰像建設発起人会が寄贈。

「母子像 生きる」

長岡戦災史料館の所蔵。「長岡空襲・60人の証言」の著者の峰村毅氏（哲也氏の従兄弟）が出版を記念し、同館に寄贈。 ブロンズ像の高さ60cm、銀杏の台座75cm。
サブタイトル「空襲に遭った親子が戦後逞しく生きる像」

「良寛さん、あそぼ」

新潟市・西大畠公園内にある。(新潟市立美術館前)

2011年が良寛没後、180周年記念、新潟良寛会が寄贈。

6) その他

釜沢の「石彫の道」の石彫群

随所にある良寛像、親鸞像

「長岡今昔」

長岡駅舎に付いている陶板の壁画。「上越新幹線」開業にともなう長岡駅の完成を記念して製作されたもので、長岡祭りの三尺玉花火・長生橋・火焔土器・長岡藩士・米百俵など城下町長岡にちなんだ題材が描かれています。

作者はレイ・フランセン氏であり、浜松駅の壁画の作者と同一人物です。

その他、多くのモニュメントが見られます。

像主、或いは碑文だけでなく、それぞれに歴史、関係した人々の想いがあり、

短い文章では言い尽くせない、素晴らしい物語を持っています。

その物語を調べながら周ることが、モニュメントの楽しみ方の一番だと思います。

長岡赤十字病院 正面玄関前の「HIGH SPIRIT」

・ふるさとの森の諸施設オープン

ハイブ長岡(長岡産業交流会館)は1991年10月16日に開館。

「米百俵の群像」は 平成3年(1991) 10月除幕

近美は1993年7月に開館。

長岡リリックホール 1996年(平成8年)11月1日

長岡赤十字病院 1997年(平成9年)9月 - 現在地に新築移転

- ・長岡赤十字病院 亀倉雄策のモニュメントが
エントランスと中庭に 「HIGH SPIRIT」。
亀倉雄策賞のトロフィーの原型。

HIGH SPIRIT 不屈の精神
病気と闘う患者さんを励ます気持ちか。



Japan Graphic Designers Association Inc.

亀倉雄策賞

JAGDAの初代会長を務め、広く世界のデザイン界にも影響を与え続けた故・亀倉雄策氏。氏の業績をたたえ、グラフィックデザインのさらなる発展をめざして遺族の寄付により設立された

その運営はJAGDAに委託され、1999年より毎年『Graphic Design in Japan』応募作品の中から、年齢やキャリアを問わず、最も輝いている作品とその制作者に贈られます。

亡くなる直前まで「今」の仕事で若い世代と競い、グラフィックデザイン誌『クリエイション』の編集を通じて、グラフィックデザインの芸術性、本質を追求した亀倉氏の遺志を尊重し、普遍性と革新性をもったグラフィックデザインを顕彰していきます。

その優勝トロフィーが、この「HIGH SPIRIT」を形どったもの。

・亀倉 雄策(かめくら ゆうさく、1915年4月6日 - 1997年5月11日)

新潟県西蒲原郡吉田町(現在の燕市)に生まれる。

1935年 - 新建築工芸学院に進学、バウハウスの構成理論などを学ぶ。

日本のグラフィックデザイナー。代表作にフジテレビジョンの旧シンボルマーク(8マーク)や日本電信電話(NTT)のマーク(ダイナミックループ)、

1964年東京オリンピックのポスター、

サンケイアトムズおよびヤクルトスワローズのユニフォームなどがある。

グッドデザイン賞のロゴ、世界的な工業製品のロゴでは「Nikon」が有名である。

すぐ近くの、県立近代美術館に、同氏の膨大な作品群が寄贈されており、美術館の誇るコレクションのひとつとなっている。

パブリック・アート④ 亀倉雄策“HIGH SPIRIT”、▶長岡赤十字病院

酒井実通男 Michio,Sakai

1952年、旧栃尾市生。中央大学理工学部卒業。2004年東京・目黒にて会社勤務の傍ら、絵画と本と椅子の画廊“ギャラリー・アートブックチェア”開店。現在自宅にてgallery artbookchair主宰。

先日久しぶりにこの病院の前を通って来た。長岡市内の建物としては大きな病院である。信濃川を挟んで対岸からは、大きな白い建物に小さく赤いリボンのような十字が鮮明に見えるのは実に“赤十字”的病院である。たまたま訪れた木曜日は小雨降る三月の少し肌寒い朝であった。別にこの病院に診療に来た訳ではなかったから、正面エントランスにそびえるこのストライプとボーダーのホッソリした塔と三翼で自立するタテヨコの模様とギザギザの切込みが入った低い塔のツインのモニュメントをゆっくり廻りながら、時には雨雲を仰ぎながら見回していたのである。

このツインの塔の制作者で世界的グラフィックデザイナー・亀倉雄策(1915-1997)は燕市(旧西蒲原郡吉田町)に生まれた。1964年開催の東京オリンピックの公式ポスターを制作したのは亀倉である。ポスターの大きな日の丸は未だに忘れられない。新潟県立近代美術館には充実した亀倉雄策コレクションがあるが、時々常設展で多く鑑賞することができる。

ところで、その日の小雨にビニール傘を差しながら遠く近く、病院に来られる人たちから見ればへんな奴と思われそうだが、また立ち止まりながら、また移動しながら、モニュメントのステンレス塗装のはく離までも眼で撫でながら見ているのである。そうするといろいろなことが思われるのだった。

一つは、病院だけに当然何かしらの傷を持った人がここを訪れるのだから、傷を持った人にはこんな建造物には関心があるかどうか、という疑問がまず浮かぶのである。二つには、もし仮に何らかの関心があったとして、ここに佇んで向き合う場所を何処に求めればいいのか、という疑問もある。モニュメント



亀倉雄策: HIGH SPIRIT (1997年)

の周囲は車道であるし、ほとんど駐車場であるのだった。前号にも書いたことだが、こういうパブリックアート並びにモニュメントなんていうものは無用の長物に過ぎないのである。三つ目は景観ということと病院ということの間に立ってのモニュメントの意味。または、パブリックということとの意味合いは何処にあるのだろう。四つには、こういうモニュメントなるものの、アートなるものの運命は如何に。既にこの“HIGH SPIRIT”的塗装は相当はく離しているのだった。哀れなるや。

しかし、僕は都市の中にあるこういった“無用”的造形物にとても興味がある。なぜここにこんなものがあるのか。思うにそれはそうではないのである。都市の中に異質な造形物があって、例えばそれが“HIGH SPIRIT”で、その先端を見上げれば空に灰色の雲が流れている。そして言えば、この雲の彼方には澄み切った青い空が広がっているのである。と言うことをしばらくすると、そこに思い至るのである。日々淡々な日常の中で何か異質なものに触れることで、それとしばらく見詰め合うことで、心は別世界に誘われ、また精神が別天地に連れ出されるのである。“HIGH SPIRIT”は亀倉雄策の遺作になった。



日赤病院と亀倉のモニュメント

長岡現代美術館と大光銀行の壁面の作品

「1964(昭和39)年8月1日、現在の長岡市坂之上町の地に開館。「現代美術」を名乗った世界初の美術館である。公開審査を行なう長岡現代美術館賞を設け、1968年まで5回にわたり実施している。同賞には、出品作のうち1作家1点を購入するという画期的なシステムがあった。現在長岡商工会議所となっているビル(旧長岡文化会館)の1階が当美術館にあたり、1983年まで開館していた。美術館部分は現在も美術文化ホールとして残しながら、ごくまれに展覧会を開催している。それ以外にも、ビルの外壁装飾レリーフ(斎藤義重作《大智淨光》1964)が、その名残となっている。」前庭の設計も斎藤義重作である。

つまり、世界初の「現代美術館」が長岡で誕生していたのです。長岡って、そんな博物館史上の重要なことが起こった街なのです。なお、この世界初の「現代美術館」という捉え方は、やや微妙なものです。海外のModern art museumを、戦前は「現代美術館」と訳していたことがあります。しかし、現在は近代美術館と訳し、Contemporary art museumを現代美術館と訳します。ということで、現在の解釈から「長岡現代美術館」を世界初と認めることができます。編集委員会でも了承されました。

*全日本博物館学会会の30周年事業「博物館学事典」編集委員会

1978年には大光銀行の乱脈融資が表面化し、1979年、惜しまれつつ閉館。

長岡大手通りの大光銀行の壁面に設けられた鏡面の立体。アーケードのある歩行者空間に面しています。多田美波の1978年の作品だそうですが、一連の駒形コレクションの中で斎藤義重の「大智淨光」と並び長岡では先駆的なパブリックアートです。作品タイトルの如く、まさに街路を歩く人々や移り変わる時間(歴史)を見つめる凛とした眼差しのようです。ガラスで仕切られているのがちょっと残念。



多田 美波(ただ みなみ、1924年7月11日 – 2014年3月20日)は、日本の彫刻家。台湾高雄市生まれ。1944年女子美術専門学校(現・女子美術大学)師範科西洋画部卒業。1958年二科展入選、1960年二科展特選。1962年に多田美波研究所を設立し代表に就任。光の反射を用いた抽象的立体造形作品を制作。アルミニウムを叩き、シワをつけ半球状型に造形した「周波数」シリーズは代表作。昭和期・平成期を代表する立体造形作家である。皇居新宮殿、帝国ホテル、リーガロイヤルホテル、在米日本国大使公邸(ワシントンD.C.)、外務省飯倉別館(公館)、河内長野市庁舎、松山駅などの室内・構内装飾や、壁面作品(レリーフ)を数多く手掛けた他、立体造形作品を制作した。1971年現代日本彫刻展、1976年現代彫刻展、1979年第1回ヘンリー・ムーア大賞展で、それぞれ大賞。

斎藤 義重(さいとう よしげ、1904年5月4日 ~2001年6月13日)
青森県弘前市出身の現代美術家。多摩美術大学教授。
二科会の九室会や美術文化協会の創立メンバーであり、日本の戦後美術の偉大な前衛作家として知られています。
親しみをこめて「さいとう ぎじゅう」と読まれることもある。絵画と彫刻の垣根を超えた表現を追求して作品を制作した。戦後以降の現代美術を代表する作品の数々を残し、「もの派」の作家らに大きな影響を与えた。

「1930年代に発展した日本の抽象絵画の草分けといってよい作家の一人であって、しかもかれは無名のままで埋もれていたわけでもない。」
1950年代から1960年代、日本人抽象画家にとっては苦しい時代が続いていたが、斎藤は国際市場で評価が高い数少ない人物だった]。
美術評論家の瀬木慎一は『芸術新潮』1961年2月号の評論において、「とくに昨年(1960年)は、美術界の話題が、すつかり、かれひとりによつてさらわれてしまった観がある」と書いている[21]。
さらに瀬木は『芸術新潮』1962年9月号において、「斎藤は、いまや、日本にいる日本人作家の代表選手といった格好である。」といっていた。

斎藤 義重(さいとう よしげ、1904年5月4日 ? 2001年6月13日)
青森県弘前市出身の現代美術家。多摩美術大学教授。
親しみをこめて「さいとう ぎじゅう」と読まれることもある。絵画と彫刻の垣根を超えた表現を追求して作品を制作した。戦後以降の現代美術を代表する作品の数々を残し、「もの派」の作家らに大きな影響を与えた。
「1930年代に発展した日本の抽象絵画の草分けといってよい作家の一人であって、しかもかれは無名のままで埋もれていたわけでもない。」
1950年代から1960年代、日本人抽象画家にとっては苦しい時代が続いていたが、斎藤は国際市場で評価が高い数少ない人物だった]。
美術評論家の瀬木慎一は『芸術新潮』1961年2月号の評論において、「とくに昨年(1960年)は、美術界の話題が、すつかり、かれひとりによつてさらわれてしまった観がある」と書いている。
さらに瀬木は『芸術新潮』1962年9月号において、「斎藤は、いまや、日本にいる日本人作家の代表選手といった格好である。」といっていた。

長岡現代美術館の壁面レリーフと前庭の製作。



以下、長岡現代美術館Wiki

長岡市の美術の俯瞰

江戸時代の長岡は越後長岡藩の城下町として能・茶道・文人画などの趣味に長けた人材が多く、加賀藩の金沢と並んで北陸の文化的中心地だった。

明治期以後には日本美術院(院展)で活躍した日本画家の下村觀山を招いて制作を行わせたこともあった。

長岡出身の芸術家としては、明治期に不同舎を設立した洋画家の小山正太郎(1857-1916)、大正期に太平洋画会結成に参加した高村真夫(1876-1954)などが挙げられる。

国立国際美術館長で美術評論家の本間正義は長岡出身である。

開館

太平洋戦争終戦後の1950年、新潟市出身の山本孝は日本最初期の現代美術専門画廊「東京画廊」を東京・銀座に開業した。大光相互銀行(現・大光銀行)社長で当地在住の実業家駒形十吉は東京画廊が開業して以来の顧客であり、東京画廊は駒形の財力で成長し、駒形のコレクションは山目利きで成長した。

駒形が集めた近現代美術作品を基にして、1964年8月2日に駒形を館長とする私設美術館として長岡現代美術館が開館。開館披露には美術評論家の針生一郎や今泉篤男、画家の岡本太郎、前田常作、元永定正らが国鉄上野駅発の急行「佐渡」号で駆けつけた。

1979年に閉館。

長岡現代美術館は日本で初めて館名に「現代美術」を用いた美術館であり、大光相互銀行が建設文化会館が施設に使用された。

公立の新潟県立近代美術館が開館するのは約30年後の1993年、同じく公立の新潟県立万代島美術館が開館するのは約40年後の2003年であり、長岡現代美術館は新潟県初の本格的な美術館だった。開館時には日本を代表する現代美術家斎藤義重のレリーフ「大智淨光」が建物の正面右側に設置され、2階ロビーには前田常作の壁画が設置された。

開館時の1階展示室常設展示作品は33点であり、パブロ・ピカソ、フェルナン・レジェ、ワシリー・カンディンスキー、ヴォルス、フリーデンスライヒ・フンデルトヴァッサー、ジュゼッペ・カポグロッシ(英語版)、タジリシンキチ、岡本太郎、前田常作、元永定正、川端実、高間惣七、桂ユキ子、オノサト・トシノブ、白髪一雄、田中田鶴子などの作品であった。

3階展示室には近代洋画が集められ、浅井忠、青木繁、岸田劉生、萬鉄五郎、前田寛治、佐伯祐三

小出檜重、梅原龍三郎、安井曾太郎、鳥海青児、海老原喜之助、脇田和、糸園和三郎、横山操、加山又造などの作品が開館時に陳列された。～この部分を、新潟県が購入したことになるか、

7. 近美の屋外展示作品

これは、モニュメントというより、純粹に空間芸術作品が屋外に展示されている、というもので、とにかく大きく、重量感に満ちています。是非、お立ちより下さい。美術館駐車場の奥からも、信濃川の土手からも行けます。

これらの屋外展示物は、1995年、1997年の二回にわたり、収集され、これらをまとめ、1998年に「インサイダー・アウトサイダー」展が開催されました。その後、2000年にボテロ展があり、そのときに、同氏の作品を一点購入し、これはエントランス前に展示されています。

